

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23330209

研究課題名(和文) 学校における心の健康と発達支援～学校力と地域・文化資源の活用

研究課題名(英文) The strategy of mental health and developmental support focused on the utilizable support resource inside and outside school.

研究代表者

青木 紀久代 (Aoki, Kikuyo)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：10254129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：学校内外の援助資源を有効利用するためのアセスメント方略の開発と地域参加型支援システムモデルの構築を目的とした。まず、子どもの心と身体の健康の成り立ちを学校と放課後の生活を合わせて捉えるため、包括的學校メンタルヘルス質問票を作成した。これを、国内外の複数地域で実施し、地域・文化差を検討した。これをもとに、日本人学校における学校メンタルヘルスに関する支援を行い、効果を検討した。支援の主な方略は、これまで日本国内で行ってきたコンサルテーションプログラムや、遠隔地会議による心理教育的支援を組み合わせたものである。実践成果を、保護者向けのリーフレットにまとめ、啓発活動の一助とした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was twofold: first to develop an assessment accesses the utilizable support resource inside and outside school. Second to construct a community participation type systematic model effectively utilizing the resources. Considering the foundation of students' mental health as a combination of their life inside and outside school, we developed a comprehensive assessment-Mental Health Scale. Using this scale, we assessed mental health of students from schools in Japan as well as abroad, and discussed the differences due to cultural context and areas. School based interventions were carried out based on the results and the effect were examined. The main strategy of the support system is that our existing consultation program is combined with a long-distanced psycho-educational support program. The outcome of the interventions were summarized in a parents-oriented leaflet that could help in the awareness-raising activities of students' mental health.

研究分野：社会科学

キーワード：学校メンタルヘルス 日本人学校 コミュニティ援助 海外子女教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校臨床における学校力の活用

文部科学省が打ち出した、平成23年度「新しい公共型学校創造事業」では、『地域コミュニティ学校』のモデルを構築し、新しい公共型学校の要素を明らかにすることを目指している。「新しい公共」となる学校は、様々な当事者の自発的協働の場となり、人や地域の絆を再生し、地域の子育て力を向上させる使命を持つことになる。その後も、「チーム学校」等、学校の多様な地域や家庭のニーズに広く応える体制づくりが進んでいる。

このように公立学校のあり方が大きく再編されようとする今、「児童・生徒（以下子ども）の心の健康と発達促進」（以下、学校メンタルヘルス）に貢献してきたスクールカウンセラーの実践モデルにも、早急な見直し求められるであろう。スクールカウンセラー制度以来、学校臨床においては、個人心理療法的な対応に加えコミュニティ・アプローチの習得は必須となってきた。さらに学校が校外資源を多用することを前提にするならば、エコロジカル・モデルをもとにした子どもの発達理解と対応の工夫が求められるであろう。このことにより、学校メンタルヘルスの実践が、よりいっそう学校の教育文化に根付くことを可能とする。筆者はこのような立場から、学校メンタルヘルスの支援を行う上で、活用可能な学校内の様々な仕組みや機能を学校力ととらえて、その構造を明らかにしてきた。学校力を包括的にアセスメントすることができると、校内のメンタルヘルスのサポート活動の成功率は格段に向上する。

(2) 学校臨床における地域力の活用

また、ある国内離島の小・中学校での実践研究からは、子どものメンタルヘルスを支えている学校外の援助資源、例えば地域の人的ネットワーク（ソーシャル・キャピタル）や豊かな自然環境が、都市部との比較から地域力の特徴として見いだされている。

近年国内外の研究からも、ソーシャル・キャピタルと各種健康指標との関連が注目されている。ソーシャル・キャピタルが豊かな社会では、人々が助け合い、心理社会的ストレスも少なくなるために健康状態も良好になると考えられている。これは、まさに新しい公共における地域再生と言えるだろう。

本研究ではこうした人的・物的資源を地域力とし、国内外の学校メンタルヘルスの関連を検討していく。そして、地域コミュニティ学校の柱にある地域力を活かした学校メンタルヘルス支援の実践モデルを模索したい。

2. 研究の目的

以上から本研究は、学校生活における児童・生徒の心の健康と発達支援に資することを目指し、次の2点の目的とそれを達成する

ための4つの課題を行う。

(1) 目的 1 学校内外の援助資源を有効利用するためのアセスメント方略の開発

課題 1：これまで明らかにしてきた学校力の構成要因を基に、心の健康の第一・第二次予防に活用できる地域援助資源も含む包括的
学校メンタルヘルス質問調査票を作成する。
課題 2：課題 1 で見いだされた地域資源のアセスメント項目を国内の離島（沖縄など）・都市部・及び日本人学校（米国・香港・マレーシア）で比較調査し、共通項目と、地域・文化的な違いのある項目を精査する。

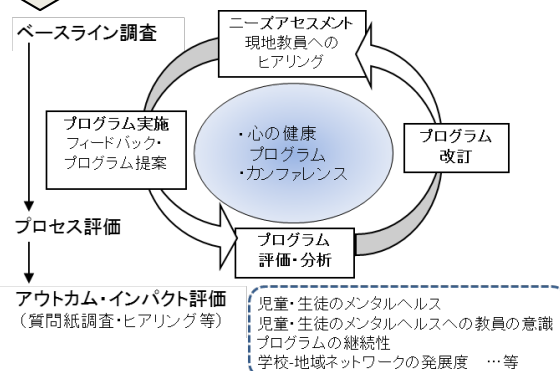
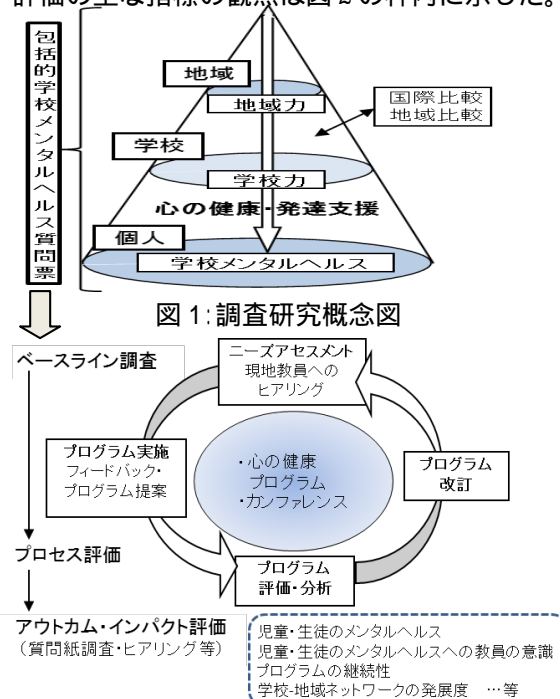
(2) 目的 2 地域参加型支援システムモデルの構築

課題 3：実践モデル校（米国の日本人学校）にて目的 1 で作成したアセスメントツールをもとに、学校力・地域力を生かした学校メンタルヘルス・プログラムを策定し、実践評価を行う。

課題 4：課題 3 のプログラム策定方法を活用し遠隔地でのプログラムの試行的実施と評価を行う。

3. 研究の方法

上記研究課題は、調査研究、実践研究を通して検討された。調査研究では、既に作成した学校メンタルヘルス尺度、学校力アセスメントツールなどと共に、包括的
学校メンタルヘルス質問調査票を作成した。これを複数の地域・文化圏での小・中学校で比較調査した（図1）。また、実践研究では、プロセス評価をしながら適宜プログラムの修正を行った。ベースライン調査、アウトカム・インパクト評価の主な指標の観点は図2の枠内に示した。



4. 研究成果

(1)課題1：包括的学校メンタルヘルス質問票の作成

メンタルヘルスとの関連要因に関して、先行研究をもとに整理した。中でも、ソーシャル・キャピタルに着目し、これに関する文献調査を行い、質問票の作成ならびに実施にあたっての概念整理や課題の抽出を行った。

質問票は、子ども個人の心の健康や心理的資質に加え、児童生徒の学校生活やくらしについて全般的に尋ねるものとした。この質問票では、学校生活における子どもの心の健康と発達に有効な個人の資質(強み)や援助資源(サポート)を多層的に探求し、学校におけるメンタルヘルスに資することを目標とし、以下の5領域から構成した。

ライフスタイル領域

子どもの生活全般を知るために、食事、睡眠、運動、ならびに児童生徒の余暇の過ごし方について尋ねた。

学校生活領域

子どもが学校に対して愛着や安心を感じているか、学校で自律的に活動できていると感じられているかを把握するために、「学校との結びつき」と「生徒自律性」について尋ねた。また、「教師との関係」、「学習意欲」、「成績」の3つの観点から、教師に対する意識や学習への意識を把握した。

心の健康領域

学校における子どもの心の健康を6つの側面で捉える「学校メンタルヘルス」と、心に影響を及ぼすものとしての「ストレス頻度」とその内容について尋ねた。「学校メンタルヘルス」の項目は青木(2007)を用いた。また、子どもが主体性を持って生き生きと暮らしているかどうかを把握するために、「心理的ウェルビーイング」と「自尊感情」について尋ねた。

ソーシャル・キャピタル領域

その地域や文化の様々な社会グループによって形成・共有される相互関係、すなわち地域社会がもつ社会関係資本を捉えた。内閣府(2003)を参考とし、家族や友人を中心とした対人関係や周囲の人々への「信頼」、さらに、地域社会における「つきあい・交流」、「社会参加」について尋ねた。

援助資源領域

個人が有する資源として、個人が持っているレジリエンスに加え、子どもが感じている学校の魅力を、学校がもっている資源(「学校力」として捉えた。

以上の内容について、年齢による質問項目の理解度を考慮し、言葉の言い回しを修正し、包括的学校メンタルヘルス質問票の小学生版と中学生版を作成した。標準化がなされている学校メンタルヘルス尺度を除く、他の尺度に関しては、因子構造の検討などを行い、

一定の信頼性と妥当性が確認された。

(2)課題2：国内外での比較調査

課題1で作成した包括的学校メンタルヘルス質問票を国内外の複数地域で実施し、地域・文化差の検討を行った。心の健康領域では学校メンタルヘルスや心理的ウェルビーイング、自尊感情やストレス頻度をとりあげた。また、援助資源領域では個人の有する資源としてレジリエンスや、援助資源として家族・友人との関係や学校との結びつきをとりあげた。

国内都市部・国内離島・及び日本人学校(北米・東南アジア・アジア)の5地域の小学4~6年生1,443名、中学1~3年生1,371名の男子:1,392名 女子:1,422名の、計2,814名に協力を得た(表1)。

表1:対象者

	国内(都市部)		国内(離島部)		北米A		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
小学校	173	185	149	118	73	33	
中学校	109	247	267	283	40	23	
小計	282	432	416	401	113	56	
合計	714		817		169		
	北米B		アジア		東南アジア		合計
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
小学校	30	21	206	191	133	131	1443
中学校	30	21	153	135	29	34	1371
小計	60	42	359	326	162	165	
合計	102		685		327		2814

地域・学校種(小・中)の検討

各尺度について、地域と学校種の2要因分散分析を行った。またストレス・援助資源は、自由記述から得られた記述を内容別に分類し、国内外の違いについて²検定を用いて検討した結果も合わせて記した。

学校メンタルヘルスの下位尺度得点は、男女ともに有意差が認められた。全般的に、日本国内の小中学生の方がメンタルヘルスが良好で、アジアの日本人学校と有意差があることが示された。特に、「対人緊張」と「非効力感」では、日本国内と日本人学校との差が見られた。また、日本人学校では、中学生での得点上昇が大きい傾向が認められた。日本人学校では、メンタルヘルスを保つことが困難なことが示唆された。下位尺度のひとつである「抑うつ傾向」の男子のみの尺度得点の結果を図3に示す。

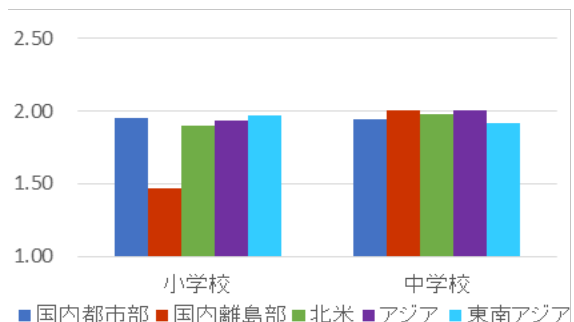


図3:抑うつ傾向得点の地域差(男子)

また、「ストレス頻度」は、国内都市部が国内離島や日本人学校に比べて高く、ストレスを感じる頻度が高いと児童・生徒が感じていることが示された(図4)。海外生活では日本国内とは異なる文化に触れること自体がストレスとなるとされるが(文部科学省, 2003)、それは、児童・生徒にとって恒常化しているものであり、彼らが日常的なストレスとして認知していないことが推察される。したがって、児童・生徒自身が異文化ショックを感じていても、そのことを相談しようと思わず、溜め込む傾向になりやすいと考えられた。国内離島でも同様の傾向がみられる可能性が示唆された。

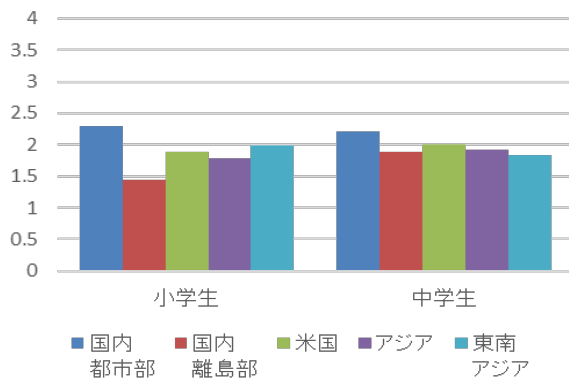


図4: ストレス頻度の地域差

続いて、ストレスの記述内容を「家族」「友人」「教師」「勉強」「課外活動」「自分」「秘密」「その他」の8つで評定した。国内都市部と、米国・アジアの3地域における違いについて²検定を実施したところ、有意差が見られた(小学生; $\chi^2=48.1, df=6, p<.01$, 中学生; $\chi^2=14.7, df=6, p<.05$)。小学生では、日本人学校において家族関係のストレスを挙げている児童が多く、中学生になると、アジアの日本人学校では依然友達関係のストレスの割合が高く、米国の日本人学校では勉強面のストレスの割合が増えていた。また、日本人学校は部活動のストレスが少ないことが示された。

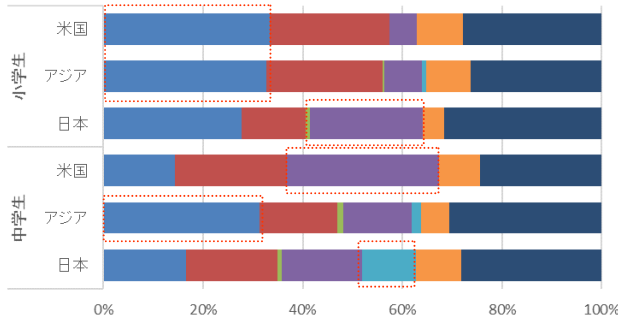


図5: ストレス内容

さらに、学校資源に関する自由記述の内容を分類し、日本と米国の違いについて²検

定を実施したところ、有意差が見られた($\chi^2=30.48, df=4, p<.01$)。下位検定を行ったところ、「教師」を除くすべてのカテゴリで有意な差が見られた。米国の日本人学校では「雰囲気」が多く、「友人」「環境」「勉強」は日本国内が有意に多かった。特に日本人学校においては、子どものメンタルヘルスを支える上で、学校や教師の役割が大きいことが推察された。

地域ごとの関連要因の比較

WHO (2012) による Health Behavior in School-aged Children(HBSC)において提案されたモデルに基づき、国内と日本人学校の中学生における、心理社会的学校環境からメンタルヘルスへの関連要因を検討するHBSCモデルを援用し、学校メンタルヘルスに影響を与える学校を中心とした様々な援助資源や個人資源などの関連要因の違いを、多母集団同時分析を用いて検討した。その結果を、図6に示す。国内及び日本人学校ともに、自尊感情やレジリエンスが、メンタルヘルスを良好に保つ要因であった。それらを高める要因としては、対人的な援助資源が直接的に影響を与えているというよりも学校との結びつきを媒介し、間接的に寄与することが示された。さらに、その学校との結びつきを高める要因については両地域のパス係数に有意な差が見られた。日本国内では、家族、友人、教師、それぞれが寄与するのに対し、日本人学校では教師のみが寄与していた(国内; $\beta=.13, p<.01, \beta=.38, p<.001, \beta=.23, p<.001$, 日本人学校; $\beta=-.16, n.s., \beta=.09, n.s., \beta=.35, p<.01$)。学校での生活がメンタルヘルスを良好に保つことは、地域によっても変わらず中学生にとって重要であるが、その適応感を支える対人的な援助資源は両地域により異なることが示唆された。

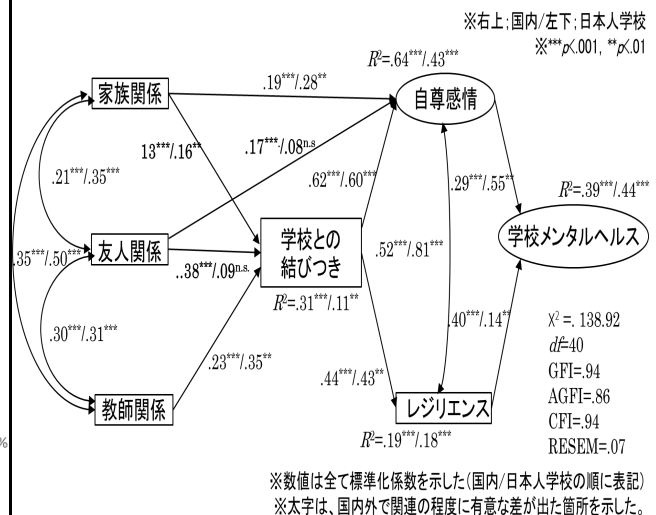


図6: 多母集団同時分析の結果

また、学校メンタルヘルスに与える学級や学校などの集団からの影響と個人の影響を、マルチレベル分析を用いて検討した。その結果、子どもが所属する集団内の学校に対する肯定的感情が高いことが、子ども個人のメンタルヘルスを良好に維持することが実証された。したがって、学校でのメンタルヘルス支援を検討する際に、個人へのアプローチに加えて、ポピュレーションストラテジーの観点から学級へのアプローチが有効であることが示唆された。

(3)課題3及び4：プログラムの策定と実践評価

北米地域にある日本人学校をモデル校とし、4年間の縦断的実践を行った。学校メンタルヘルスの状況把握と子ども理解、個別対応の検討を教員らと行うことに加え、新たに、全教員を対象として調査結果の理解と活用法を討議した。また、調査結果の一部を保護者会でフィードバックしたりするなど、学校全体の学校メンタルヘルス支援に関する啓発に寄与するプログラムを策定した。

実践評価は、子ども個人の学校メンタルヘルス得点の縦断的变化を検討した。2年以上継続して調査に回答した児童・生徒110名を対象に潜在曲線モデルを用いたところ、傾き因子が有意となり、メンタルヘルスが良好になることが示された。以上より、学校力・地域力を生かした遠隔地での学校メンタルヘルス・プログラムの効果が示された。

最後に今後の遠隔地での支援に向けて、日本人学校を訪問して現場の実状とニーズをおさえ、遠隔地会議の利点を活かした学校メンタルヘルス支援のあり方について、現場の教員らと検討を行った。

以上の成果として、日本人学校に通う児童生徒の心の健康に関する保護者向けのリーフレットを作成した。これを海外子女教育振興財団ならびに、調査協力校や関係者に配布したところ、反響が得られた。今後、海外子女教育振興財団を通じ、各地の日本人学校にも配布し、現地の保護者に届ける予定である。

なお、これらの結果の一部は、国内外の学会にて発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計48件)

新城綾乃・高倉実・小林稔・和氣則江・宮城政也 沖縄県の小学校高学年児童における身体活動と学業成績との関連 学校保健研究, 56, 420-426, 2015. 査読有

石村郁夫・羽鳥健司・山口正寛・野村俊

明・鋤柄のぞみ 自己への思いやりの態度を育成させる介入法の効果に関する研究 Japanese Journal of Research on Emotions, 20(Supplement), 11, 2013. 査読有

青木紀久代 間主観性と乳幼児期の心理臨床 FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌, 4, 13-17, 2011. 査読有

朝日香栄・青木紀久代・壺井尚子 写真投影法に見る子どもにとっての環境内資源 友人関係に焦点を当てて コミュニティ心理学研究, 14(2), 132-150, 2011. 査読有

〔学会発表〕(計67件)

青木紀久代・野村俊明・福榮太郎・平野直己・鷗養美昭 暮らしの中の心理療法

その1：学校メンタルヘルスの現状と課題 日本心理臨床学会第34回秋季大会, 2015.9.19, 神戸国際会議(兵庫県神戸市). 査読無

Koshi, M., Aoki, K., Kobayashi, M., Hirano, N., Machizawa, S., Nomura, T., & Yatsuda, M. A Cross-sectional Multilevel Analysis of How School Connectedness Enhances Resilience Among Japanese Students At Home and Abroad. 123rd Annual Convention of the American Psychological Association, 2015.8.9, Toronto(Canada). 査読有

Aoki, K., Koshi, M., & Machizawa, S. School connectedness and depression among domestic and foreign Japanese students: A cross-sectional multilevel analysis. 123rd Annual Convention of the American Psychological Association, 2015.8.8, Toronto(Canada). 査読有

Saito, A., Aoki, K., Asahi, K., Kobayashi, M., Hirano, N., & Nomura, T. Stress of Japanese Youth Overseas: Cross-Cultural Comparisons in the U.S., Hong Kong, Japan. 123rd Annual Convention of the American Psychological Association, 2015.8.8, Toronto(Canada). 査読有

Kobayashi, M., Takakura, M., Gana, Y. et al. The relationship between self-determined motivation towards physical activity and lifestyle in adolescent girls. 46th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, 2014.11.18, Kuala Lumpur(Malaysia). 査読有

青木紀久代・平野直己 在外教育施設におけるメンタルヘルス支援を考える

日本心理臨床学会第 33 回秋季大会論文集, 632, 2014.8.23, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市). 査読無

Aoki, K. International learning service for psychology graduate students in Japan: globalizing the pedagogy. *122nd Annual Convention of the American Psychological Association*, 2014.8.7, Washington, D.C.(U.S.A).

Aoki, K., Machizawa, S., Koshi, M., Hirano, N., Yatsuda, M., Asahi, K., Saito, A. Protective Factors of Depression in Japanese Youth in Japan and the U.S.: Cross-Cultural Differences and Implications for School-Based Interventions. *122nd Annual Convention of the American Psychological Association*, 2014.8.8, Washington, D.C.(U.S.A). 査読有

Kobayashi, M., Aoki, K., Koshi, M., Saito, A., Asahi, K. et al. Obtaining effective assistance resources for children's development and mental health: Actual mental health condition among elementary school and junior high school students in Miyako Island, Okinawa. *The 21th IUHPE World Conference on Health Promotion and Health Education*. 2013.8.29, Pattaya(Thailand). 査読有

Aoki, K. Comprehensive School-based Mental Health Project. (APA Division 52 16th Anniversary Meet Eminent International Psychologists: Dr. Aoki and Dr. Ibrahim.) *121st Annual Convention of the American Psychological Association*, 2013.7.31, Honolulu(U.S.A). (invited lecture.)

Nomura, T., Ishimura, I., Koganei, K. et al. Research on self-compassion and self-disgust in attachment styles. *12th International Mood and Anxiety Disorder Forum*, 25, 2012.11.8, Barcelona(Spain). 査読有

青木紀久代・村山正治・石田陽彦・平野直己・押江学・朝日香栄 心理臨床とコミュニティ心理学 関係の再考から再構築へ 日本心理臨床学会第 31 回秋季大会発表論文集, 715, 2012.9.14, 愛知学院大学(愛知県日進市). 査読無

Aoki, K. Community-Based Mental Health Intervention for Infants and Their Families in the Afflicted Area. *120th Annual Convention of the American Psychological Association*, 2012.8.2, Orlando(U.S.A).

齋藤啓・青木紀久代・加藤和代・祝部大輔・松本建治 北東アジア地域における学校メンタルヘルス尺度の妥当性の検討 日本学校保健学会第 58 回大会講演集, 245, 2011.11.13, 名古屋大学(愛知県名古屋市). 査読無

Aoki, K. Evaluating the school based mental health promoting programs in Japan. *The American Psychological Association Division 27: The Society for Community Research and Action 13th Biennial Conference*, 134-135, 2011.6.17, Chicago(U.S.A). 査読有

〔図書〕(計 15 件)

青木紀久代 日本人学校に通う子どもの暮らしと心の健康, 福村出版, 2016, 23 ページ.

青木紀久代・矢野由佳子 子どもとかわる力を培う 実践・発達心理学ワークブック, みらい, 2013, 120 ページ.

青木紀久代・平野直己 乳幼児期・児童期の臨床心理学, 培風館, 2012, 224 ページ.

青木紀久代 実践・発達心理学, みらい, 2012, 208 ページ.

平野直己 コミュニティ臨床の理論 2: ローカルな観点から, 下川昭夫(編) コミュニティ臨床への招待, 新曜社, 2012, 277-305.

青木紀久代 コミュニティ援助の発想, 日本心理臨床学会(編) 心理臨床学事典, 丸善出版, 2011, 480-481.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

青木 紀久代 (AOKI KIKUYO)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授
研究者番号: 10254129

(2) 研究分担者

小林 稔 (KOBAYASHI MINORU)

京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 70336353

平野 直己 (HIRANO NAOKI)

北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 80281864

野村 俊明 (NOMURA TOSHIAKI)

日本医科大学・医学部・教授
研究者番号: 30339759

(3) 連携研究者

谷田 征子 (YATSUDA MASAKO)

お茶の水女子大学・人間発達教育科学研究
所・特任講師
研究者番号: 60635150